

室生の「生き抜いた景観」の再発見・活用研究会

日本都市計画学会関西支部 都市計画研究会活動支援 2023 年度活動報告【中間報告】

研究会代表：高木悠里（大阪公立大学大学院工学研究科）

1. はじめに

歴史的な景観資源を対象とした景観施策や景観づくりの取組は、従来、歴史資源が色濃く残るエリアを対象とし、規制・誘導手法を中心に景観保全が行われることが多かった¹⁾。一方で近年は、時代の移り変わりを経て様々な変化を受けながら「いまも生き生きとある場所を物語る景観」として、「生きた景観」の重要性が指摘されている²⁾。変化の激しい現代社会にあって、「生きた景観」に立脚した景観づくり・まちづくりはますます重要になるだろう。

本研究会が対象とする室生集落は、奈良県宇陀市の東部に位置し、室生川南側の山あい展開する集落である（図1、図2）。室生川流域は火山活動による独特の地形を有し、古代からの山岳信仰の広がりの中で室生集落が発展してきた。また室生川沿いの「室生寺」は、かつて山岳修行の場として始まり、現在は「女人高野」として著名である。五重塔や本堂（灌頂堂）、金堂、様々な仏像など多くの国宝・重要文化財を有し、宇陀市の重要な観光資源となっている（図3）。

一方、古くからの歴史を有する室生集落であるが、室生川の氾濫や地滑りなどの自然災害、集落の就業形態の変化、モータリゼーション、室生寺門前町の発展と衰退など、様々な変化を受けつつも、現代まで生き抜いてきた。特に室生川沿いに位置する室生寺門前町は、1960年代頃からの観光ブームのなかで形成され大いに栄えたが、近年は観光客の減少に伴い空き店舗が増加、往時の賑わいは翳りをみせている（図4、5）。また室生集落全体も人口減少・高齢化により衰退している。今後、室生集落の活性化に向けては、様々な変化を受けながらも生き抜いてきた室生の景観に価値を見出すとともに、室生寺の信仰や門前町の再生と一体となって、まちづくりに取り組むことが必要と考えている。

本研究会は、古くからの歴史のなかで様々な変化を受けてきた室生の景観を「生き抜いた景観」と捉え、調査と実践の両面から室生の「生き抜いた景観」の再発見・活用に取り組む。調査編では、室生集落の地形や土地利用に着目し、その景観特性の解明に取り組んだ。実践編では、門前町に着目し、観光誘客の方策や空き店舗の利活用を検討・提案・実践した。

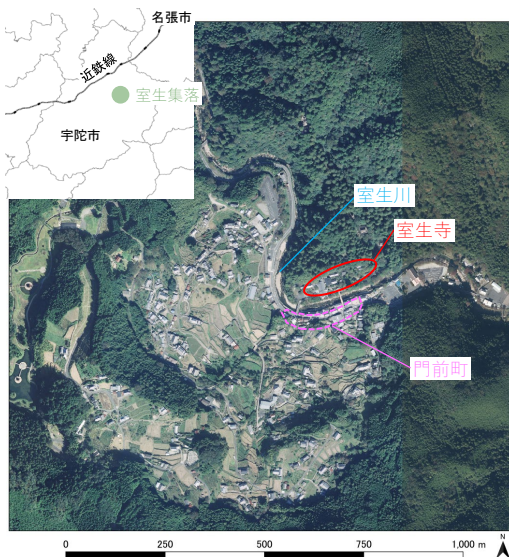


図1 室生集落の位置と様子(出典：国土地理院)



図2 室生集落の家並み



図3 室生寺本堂(灌頂堂)と五重塔



図4 室生寺門前町



図5 室生寺門前町・空き店舗

2. 研究会の構成

本研究会は、大阪公立大学都市計画研究室の教員・学生を中心に、大阪公立大学の建築計画・建築デザインの教員、宇陀市役所職員によって構成する。

また研究会活動においては、宇陀市役所関係各課（まちづくり推進課，観光課，室生地域事務所ほか），地域住民による任意のまちづくり団体である室生地区まちづくり協議会，門前町各店舗によって構成される室生寺門前保勝会，ほか地域の方々等と連携し実施した。

3. これまでの経緯

大阪公立大学都市計画研究室では、2022年7月から宇陀市役所まちづくり推進課と連携し、室生集落の調査や提案に取り組んでいる。2022年度には「まちづくりオーラル・ヒストリー」³⁾の手法を用いた地域住民の方々に対するインタビューと地域の歴史の掘り起こし，学生によるまちづくり提案等を実施した。本研究会はこの活動を母体に構成し，研究会活動を実施した。

4. 活動報告（2023年度の活動報告）

本研究会では、「生き抜いた景観」の再発見・活用をテーマに，調査と実践に取り組んだ。

4-1. 調査編

1) 調査の概要

室生集落は、火山活動や地すべり等の自然作用による特徴的な斜面地形を有する（図6，7）。樋口や中村は、わが国の景観における地形の重要性を挙げているが^{3) 4)}，室生集落の景観においても，地形はその根幹を成していると考えられる。例えば，2022年度に行った地域住民へのインタビューでは、「好きな景観」として「自宅からの眺望」を挙げる意見が多かった。斜面上の集落に位置する自宅から室生寺を見下ろす景観や，その背後の山並みを眺めるような景観が地域のアイデンティティとなっていることが示唆される。

以上より本研究会では，地形にこそ「室生の生き抜いた景観」の肝要があると考えた。そこで，地形の生み出す囲繞性や眺望性に基づき，室生集落の景観特性の解明を行った。



図6 室生集落の地形断面(カシミール3Dで作成)

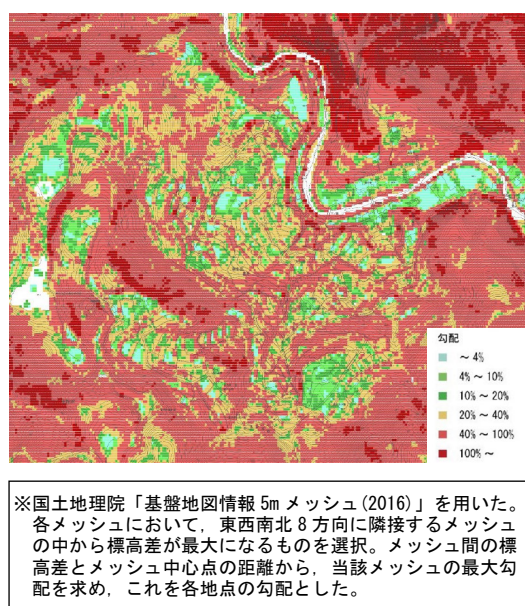


図7 室生集落の勾配(5mメッシュ)

2) 調査方法と結果

①分析単位となる視点場の設定

公共施設や観光マップで紹介された眺望場所など、12地点を「主要視点場（A～L）」に設定した。加えて、室生集落を4"×4"のグリッドに分割し、その中心39地点を「その他視点場（1～39）」として設定した。以上、51視点場（主要視点場12，その他視点場39）を分析の基本単位とした。

②視点場からの囲繞性の分析

51視点場について、5mメッシュ標高データを用いて、最大仰角（東西南北8方向）、地上開度⁷⁾を算出した。仰角（及び俯角）の算出方法は図8である。

視点場ごとの算出結果を図8に示す。なお、既往研究を参考に⁽¹⁾、仰角9°を、囲繞性を感じる基準値とした。また、仰角20°以上は、囲繞性が高いとした。視点場ごとに囲繞性の程度、その方向が異なっている。その地理的分布を考察し、囲繞性に基づくエリア分けを行った。

③視点場からの眺望性の分析

視点場からの眺望性を分析するにあたり、眺望の対象となる視対象として、室生集落を囲む山々のなかでも突出した9峰と室生寺を抽出した⁽²⁾。ここでは、9峰のうち最も象徴的である「精進峰」と、「室生寺」の眺望性の分析結果を報告する。

精進峰を眺める仰角、室生寺を眺める俯角を指標とし分析した。それぞれの位置は図9に示す。

○最大仰角
視点場から3km内における標高差と水平距離から視点場ごとに、8方向別で算出

○地上開度
[90° - α] 視点場ごとに算出
※ α = 8方向の最大仰角 θ の平均値 (°)

○囲繞性の判定

- ・仰角 9° 未満：囲繞性を感じない
- ・仰角 9° 以上：囲繞性を感じる(囲まれる場合)
- ・仰角 20° 以上：壁立的



図9 精進峰と室生寺の位置

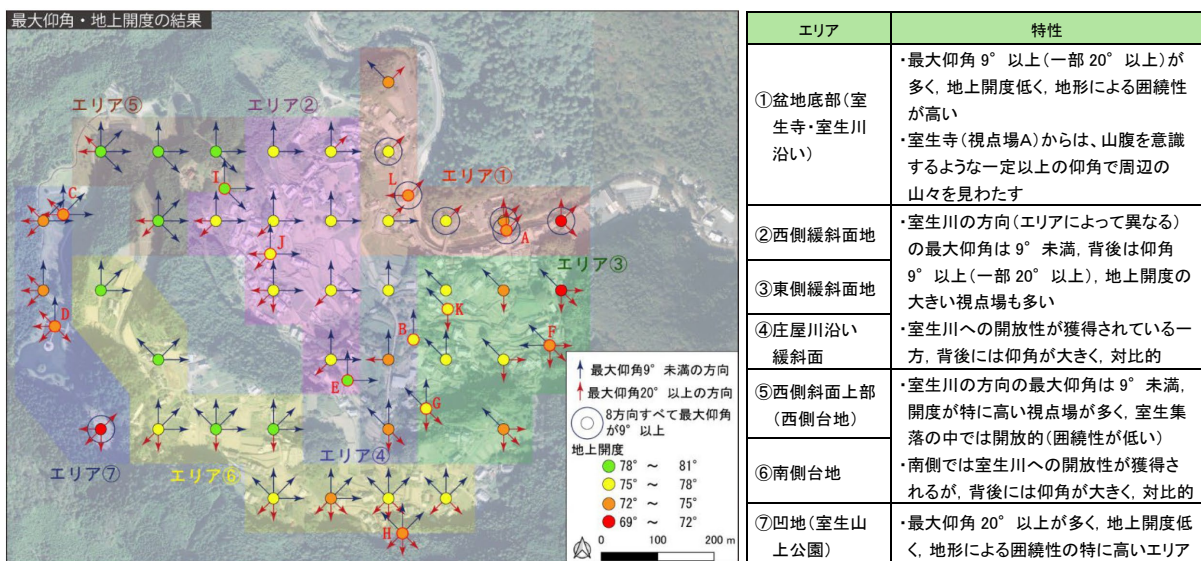


図8 51視点場における最大仰角・地上開度の算出結果とエリア分け

ア) 精進峰の眺望（仰景観）

精進峰を眺める仰角を5mメッシュ単位で算出（図10）した後、設定した51視点場における精進峰の眺望性を確認した。結果、エリア②，③，④（緩斜面）からの眺望は精進峰の仰角が9°を超えて際だった仰景観を呈す。

例えば（図11），エリア③-視点場Kは仰角21°（20°超）で、山腹斜面がひとつの小世界的と言えるほど立ち上がって見える。エリア②-視点場J，Eは仰角17°，13°，その周りは仰角9°以下で、精進峰の山容が強調されるようなスカイラインとなる。一方、エリア⑥（台地）の視点場Hからの仰角は低く、スカイラインは均されてしまう。

イ) 室生寺の眺望（俯瞰景観）

室生寺への眺望は俯瞰のため、視点場と室生寺の間に地形的隆起等がある場合は室生寺が不可視となる。そこで、室生寺を眺める俯角を5mメッシュ単位で算出した後、設定した51視点場において可視・不可視を確認した（図13）。

分析の結果、斜面上の視点場（エリア②，③，④）では室生寺が可視となりやすい。また、俯瞰景観として眺めやすい俯角10°近傍⁽³⁾で室生寺が可視となる視点場は、概ねエリア②，③，④（緩斜面）に部分的に存在している（例えば視点場E）。このような視点場では、室生寺と精進峰を一望におさめ得る、信仰対象を眺めるのに適した眺望景観を有すると言える。

一方でエリア⑥（南側台地）にも俯角10°近傍の視点場があるが、台地上からは視点場周辺の地形によっては室生寺が不可視となりやすい。

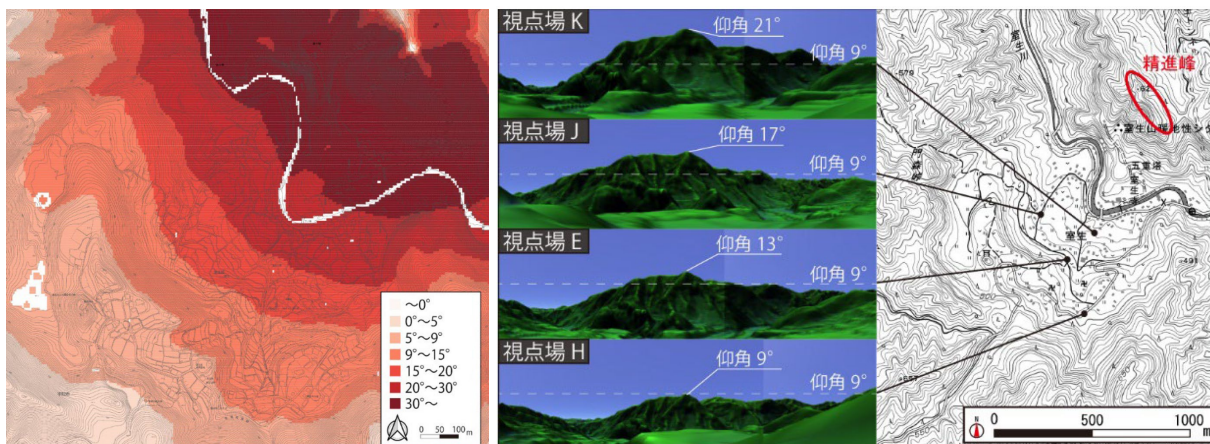


図10 精進峰の仰角(5mメッシュ)

図12 視点場K(エリア③), J・E(エリア②), H(エリア⑥)から眺める精進峰

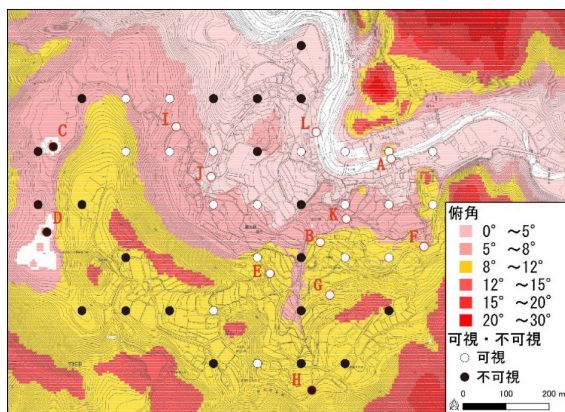


図13 室生寺への俯瞰角の分布と可視・不可視



図14 視点場E(エリア②)からの眺望

3) 調査のまとめ

以上の調査結果を図 15 にまとめる。

なお、以上の調査は、本研究会の構成員である大阪公立大学学生の修士論文の一環として実施した。調査の成果は論文としてとりまとめ、日本都市計画学会（全国大会・論文発表会）に投稿予定である。

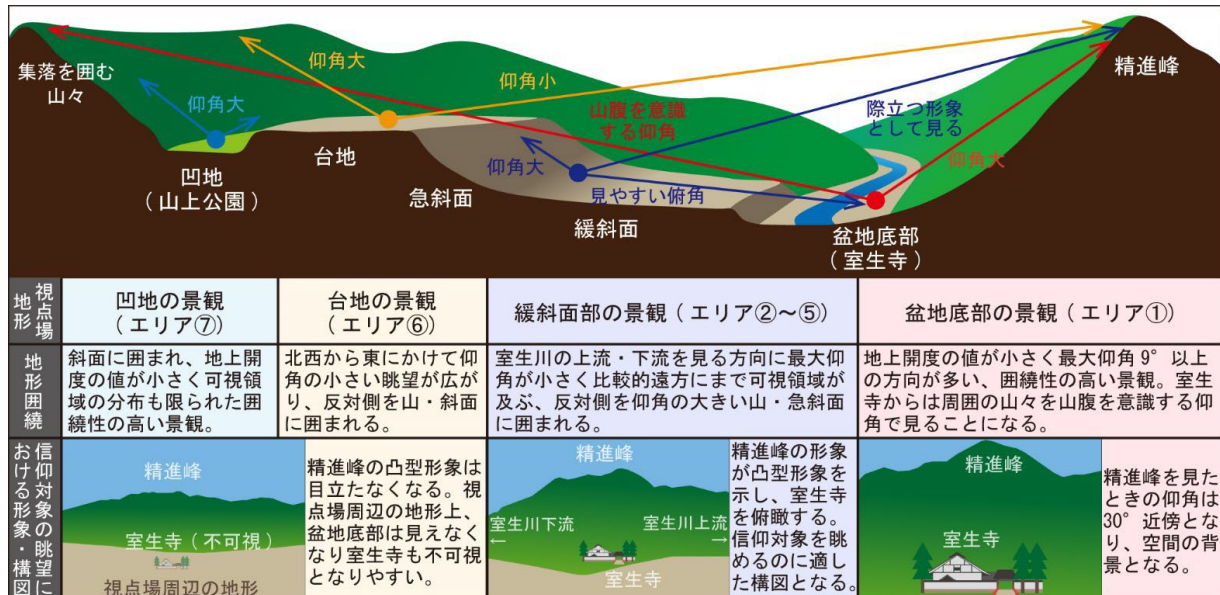


図 15 調査のまとめ：室生集落における地形の生み出す景観特性

【補注】

- (1) 参考 6) によると、山を眺める仰景観において、仰角 9° 近傍の山は山容全体を容易に見越すことができ、スカイラインだけでなく山腹にも興味をもたれるようになり、山容を身上とする山にとって最も好ましい仰景観であるとしている。また、仰角 20° 近傍を超えると意識は山腹にうつり、(山容が景として成り立つほどの魅力を備えていない限り、) 山が空間構造的な背景に留まるとされる。また、参考 8) では、仰角 9° を空間の圍繞性を感じる基準値としている。
- (2) 室生集落や室生寺は、写真家・土門拳や入江泰吉、岡部伊都子らの写真集や文学作品にたびたび登場し、その景観に関する写真や記述がみられる。また、樋口は参考 6) のなかで室生集落の景観を分析し、「八葉蓮華型」「水分神社型」の景観構造と評している。さらに、地すべり対策事業等の各種報告書のなかでも室生集落の景観に関する記述がみられ、これらの記述をもとに、視対象として 9 峰 (精進峰ほか) と室生寺を抽出した。
- (3) 参考 6) によると、俯瞰景観において俯角 10° が眺めやすいとされる。10° ± 2° (8~12°) の範囲を眺めやすい範囲として図示した。

【参考文献】

- 1) 西村幸夫：『景観法の成立をめぐる一そのねらいとその後に残されたこと』、日本都市計画学会 都市計画 350, pp10-13, 2021.
- 2) 日本建築学会：『生きた景観マネジメント』、鹿島出版会 2021.
- 3) 後藤有夢：『まちづくりオーラル・ヒストリー 〔役立ちつ過去〕を活かし、〔懐かし未来〕を描く』、水曜社 2005.
- 4) 樋口志彦：『日本の風景 一ふるさとの原型』、春秋社, pp18-45, 1981.
- 5) 中村良夫：『風景学入門』、中公新書, pp28-32, 1982.
- 6) 樋口志彦：『景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間』、技報堂出版株式会社, 1975.
- 7) 横山ほか：『開地による地形特徴の表示』、写真測量とリモートセンシング, 38(4), pp26-34, 1999.
- 8) 山口ほか：『京都東山の地形景域の構造名勝地の景観—開地の概念に基づく地形的圍繞の評価』、土木学会論文集D1, 69(1), pp64-75, 2013.

4-2. 実践編

本研究会での実践としては、地域住民の方々や室生寺門前保勝会、市役所関係各課と連携・協議のもと、室生寺門前町空店舗の利活用検討、室生寺門前町観光マップの作成を行った。

1) 室生寺門前町空店舗の利活用検討

対象は、門前町に位置する空店舗である。2棟の建築を繋いだ物件で、もともとは店舗兼住宅として利用されていた。かつては先代の所有者が住みながら物産店(お土産屋)と食堂を営業されていたが、空家・空店舗化し放置されていたところ、相続された現所有者とともに利活用のあり方について検討を行うこととなった。

本研究会では、当該空店舗を視察し、老朽化が進んでいることを踏まえ、まずは軒下空間の利活用に取り組むこととした。具体的には、旧物産展(正対して右側)の軒下、ショーウィンドー前方をまちの情報・まちづくりの情報を発信するための空間と捉え、「M-Lab ブース」と名付けて展示スペースの設置し、本研究会の活動成果を展示することとした。



写真 視察の様子：左手側が旧食堂兼住宅/右側が旧物産店、赤丸が利活用箇所



写真 上段：従前／中段：設置作業の様子／下段：完成(M-Lab ブース)

2) 室生寺門前町観光マップの作成

室生集落の東側、室生寺から室生川沿いに1km近く上った溪谷の入り口には、室生龍穴神社が存在する。龍穴神社の歴史は室生寺よりも古く、水の神・龍神が祀られている。平安時代には朝廷から雨乞いの使者が遣わされたといわれ、雨乞いの神として知られている。室生は龍神の里とも言われ、龍が棲む「龍神伝説」が伝えられている。

このように室生と龍の間には深い関係があるが、2024（令和6）年が辰年であることを前に、2023年夏頃から、室生寺門前保勝会や室生寺では龍をテーマにした地域活性化策が検討されていた。本研究会ではこの取組と連携し、龍神をデザインした門前町の観光マップを作成することとした。

観光マップの作成にあたっては門前町各店舗の店主さんにインタビューを行い、お店の思い出や自慢の一品等をご紹介頂き、これらの情報を観光マップにとりまとめた。本マップは最終調整段階であり、今後印刷・配布される予定である。



図 室生寺門前町の観光マップ案

5. 次年度に向けて

調査編は一定まとまってきたと考えている。次年度は観光動態等の調査を検討している。実践編は、空店舗活用については所有者の方との調整しつつ、設置したM-Labブースでの観光情報発信等を検討している。また、観光マップは随時更新を検討しており、ここ最近になって周辺空店舗のリノベーション等が数件進んでいることもあり、これらの情報更新等を検討している。

以上